

Title	日本における「アジア主義」
Sub Title	Pan-Asianism in Japan
Author	イサム, R.ハムザ(Isam, Hamza R.)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.1 (2006. 6) ,p.128- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究動向
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0128">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0128</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が日本語で執筆したもので、表現や言い回しに若干、不自然なところも見うけられるが、エジプトの日本学者が書いた論考を素直に紹介することに意義があると考へ、あえてあまり多くの手を入れずに掲載することにし

た。これまでほとんど紹介されることのなかったエジプト人のこの学会動向からアジア主義への関心が日本において少しでも高まれば幸いである。

## 日本における「アジア主義」

はじめに

本稿における「アジア主義」は、一九世紀後半の日本近代化過程における「脱亜入欧」論以降、二〇世紀初頭における「大東合邦論」を経て、太平洋戦争期に日本がアジア支配の正当化のために「大東亜共栄圏」というスローガンを掲げるまでの一連の思想傾向をさす。「アジア主義」思想を背景に、欧米勢力を排除して、日本、満州、中国および東南アジア諸民族の共存共栄を説き、日

本をそのアジア圏の盟主としようとした日本の野望は、武力による対外進出をもたらした。第二次世界大戦の終結によってそのような野望は消滅したにもかかわらず、被害を受けた近隣諸国はいまだに、その思想が復活するかのよう日本国内外の動きを警戒している。だからこそ、平和憲法改正論争、自衛隊の正規軍化への動き、歴史教科書問題などのような「アジア主義」思想を暗示する政治的、社会的な動向に対して、内政干渉と思わせる程、敏感な反応をするのである。

イサム R. ハムザ

即ち、日本の「アジア主義」が、二〇世紀に止まらず、二一世紀においても、以前と異なった様相で、復活する可能性なし能力を未だに維持しているとみられている。現在において、もはや「アジア主義」の武力的な応用は、無論日本にとって自滅的な行為であると思われる。ただ日本主導のアジア経済圏のような同盟の姿で現れる新たな「アジア主義」思想が国際舞台で生まれる可能性はあるかと思われる。

本稿は、「アジア主義」という思想が出現した背景と発展過程を説明し、その特徴を明らかにしようとするものであり、さらに、その思想がいかに今日まで存在しているのかという疑問に答えようとするものである。

## 一 日本の「アジア主義」の始まり―「アジア主義」の初期的動機

### 1 中華秩序からの脱出

中国は東アジア地域において、古代以来、最も影響力の強い理想的な文化国家であった。またその周辺の国々は、中国にとってその文化的水準によって属国として位置付けられていた。日本はその周辺国として中国文化の

恩恵を受けながら、対等の関係を目指したが実現できなかった。

しかし、一三世紀の後半の蒙古襲来では、中国は日本に対して文化国家とは異なる行動をとった。いわゆる文永、弘安の役で、時の鎌倉時代の日本は、元艦を沈没させ中国に勝利した。それは日本の中華秩序からの最初の脱却だと思われる。

さらに、一六世紀の豊臣秀吉（一五三六―一五九八年）による文禄、慶長の役は、特筆すべき出来事として位置づけることができる。秀吉の朝鮮出兵は、アジア文化圏において、中華秩序に代って、日本を中心とし仏教、儒教を背景とする新秩序の構築を目指していたと思われるからである。

この時期は、中国帝国が弱体化するとともに、「大航海」時代のヨーロッパ諸国によるアジア・アフリカへの植民地獲得抗争が始まった頃であった。帝国の一部であったマカオが、ポルトガル人の居住地（植民地）となったことは、事実上、中華秩序が乱れ、日本も含めた東アジア諸国の危機感が高まる結果となった。

日本においては、長崎を教会の領域にされることに危機を感じた秀吉は、一五八七年にポルトガルとスペイン

の宣教師を追い出し、国内の秩序を脅かしかねない宗教紛争を事前に鎮火した。秀吉の政策は、一六世紀のヨーロッパのアジア政策に対する日本の態度が、中国と異なっていたことを示すものである。さらには、既存の秩序が崩壊しつつある東洋の再編を試みた点において、秀吉の政策つまり日本の態度は、新たな秩序づくりに向けての中華秩序からの脱却以外の何ものでもないといえる。

## 2 鎖国時代とその思想

秀吉以後の徳川家は、東洋を脅かしていた西洋勢力に対応できないアジアの中心的国家である中国の対外政策に対して、秀吉と同様の危機感を抱いていた。しかし、徳川体制が目指したのは、武力によるアジアの新秩序の構築ではなく、鎖国政策によって、日本独自の文化思想を確立・維持することであった。日本は、儒学を基盤とする政治、社会体制を安定させることによって、中国に代る新文化国家を結果的に目指すようになったのである。鎖国政策は、西洋と比較した場合、日本の近代化を妨げたと批判する研究がある。しかし、この時期に日本の各面での独自性が確立され、日本独自の近代国家の基礎と日本の「アジア主義」の基盤が形成されたと思われる。

近世に日本語、日本文学を漢風から純化することを目的として始まった国学運動は、その基盤の一つを成した。本居宣長（一七三〇～一八〇一年）から、平田篤胤（一七七六～一八四三年）とその学派を中心に展開された国学は、「神国」思想の主潮を形成した。

また国学派と共通する、自国を主体とする思想傾向をもつ水戸学派においては、日本を中心とする世界観が形成された。水戸学派による一六五七年からの『大日本史』の編集は、政府の命令ではなく自発的に開始された。それが完成したのは二〇世紀初頭、日露戦争終了後の一九〇六年であった。つまり、水戸学派の思想的な影響は、幕末維新时期に止まらず、少なくとも二〇世紀前半期にまでも及んでいたと思われる。

## 3 西洋の脅威と『新論』

鎖国下日本の近世では、東アジアに進出した西欧列強による開国要求は、ペリー来航以前にもしばしばあった。一八世紀前半の元文四年（一七三九年）には、スペインペルグ指揮下のロシア探検船が、陸奥、安房、伊豆の沿岸に出没した。以来、ロシア、イギリス、アメリカの各国船が一世紀以上に亘って様々な目的を持って来航し、一

八世紀末から各国があらゆる手段を用いて日本に通商を求めてきたのである。

こうした西欧列強の圧力が徐々に強まってゆくにつれ、日本の対外的危機感は次第に広まり、様々な海防論や攘夷論が著わされた。その中でも、一九世紀前半の鎖国下日本でアジアを含む世界認識の有様をうかがわせる著作は、水戸学派の会沢正志斎（一七八二〜一八六三年）の名著『新論』において他にはないであろう。水戸学は天保学とも呼ばれたほど、水戸藩を越えて全国の有志に少なからぬ影響を与えた。特に会沢の『新論』は、文政八年（一八二五年）に執筆されて以来、天保から弘化、嘉永頃にいたるまで、門人や有志の間で筆写されて広く伝播した。『新論』は安政四年（一八五七年）に公刊されるまでに、既に当時の世論形成に大きく貢献した。この書は当時の攘夷論を代表するものであったと言っても過言ではない。

西欧列強の圧力への反発として当然自国の優越性の認識にむかう動きが生じてきた。会沢もそれを背景にし、世界における日本の位置付けとアジアについて、『新論』でこのように述べている。

「夫れ神州は大地の首に位す、朝氣なり、正氣なり

日本における「アジア主義」

（神州は本、日神の開きたまひしところにして、漢人、東方を称して日域となし、西夷もまた神州及び清・天竺・韃靼の諸国を称して、亜細亜と日ひ、また朝国と日ふ。皆、自然の形体に因りてこれを称するなり）。朝氣・正氣はこれ陽となす、

故にその道は正大光明なり。人論を明らかにして以て天心を奉じ、天神を尊んで以て人事を尽し、万物を發育して以て天地の生養の徳を体す。<sup>1)</sup>

西洋のアジア侵略によって会沢はアジアを強く認識させられた。東方にある「大地の首」たる神州は、その正大光明な道を全世界に対して明らかにすべきだと考えたのである。その「神州」を西洋の侵略から守り、その道を東方をはじめとする全世界に広めるためには、まず日本は「清」と連帯しなければならぬと会沢は言う。

「ここを以て神州と唇齒を相なすものは清なり。<sup>2)</sup>

そして朝鮮など他の東南アジアについて、次のように述べている。

「もし夫れ未だ嘗て回回、邏馬の法に沾染せざるものは、すなはち神州の外、独り満清あるのみへ朝鮮・安南等の諸国のごときも、また頗るよく特立し、未だ妖法に変ぜられず。然れどもその国は弱小にして、

本より数ふるに足らず、故に論ぜざるなり。<sup>(3)</sup>

日本と中国のほかに、イスラム教やキリスト教の勢力が未だ及んでいないアジア諸国として、儒教文化圏の朝鮮とベトナムを挙げ、両国に対してアジア文化圏としての連帯感を表して、両国を「頗るよく特立し」と持ち上げている。

アヘン戦争やペリー来航などの出来事が起こるなか、西洋の脅威に対して「神国」中心にアジアの連帯を説く水戸学派・会沢の『新論』は、明治の近代国家造りに重要な役割を担って貢献した幕末の特に若い志士層にとって、政治的な教本となったと言える。

## 二 近代日本とアジア的性質

近代以降の日本のアイデンティティーの形成は、日本の近代思想において重要なテーマであると思われる。近代国家造りにおいて、不平等条約の改正と国家の独立を実現するため、西欧列強に劣らないよう「富国強兵」のスローガンが掲げられた。明治日本は、西洋文化を基盤とする近代文明を取り入れ、アジアではなく欧米諸国を偏重する政策をとったが、これは当然であった。しかし西洋文化を紹介し、欧米文明を取り入れる門を広げる政

策に対して、日本の伝統文化とその背景にある東洋に対する認識を呼び起こす反動的な傾向が現れたのである。日本の近代思想において、日本のアイデンティティーとは、西洋的近代化とともに、アジアの特徴をもった文化様式が確立されることであつたと思われる。その確立過程において、伝統文化と西洋的近代化との対立から、文化、思想的に欧米へと向かう「脱亜」と、アジアへと向かう「連帯」という相反する二つの思想が生まれた。

### 1 「脱亜」

その傾向を代表する思想家の一人が福沢諭吉（一八三五—一九〇一年）である。福沢は西洋の基準で世界の文明を見た。彼は『文明論之概略』（一八七五年）で、西欧が有する文明が必ず未開（日本・アジア）、野蛮（オーストラリア・アフリカ）を圧迫すると判断して、明治日本が国家独立を達成するためには、西洋文明を摂取し、文明国の一員に名を列すべきだと主張した。彼は、西欧文明の無防備な受け入れは国の独立を危うくすること、国の独立を達成するためには西欧文明の摂取が必要であることとのジレンマに気がついており、当時の日本がその状況に立たされていることを認識していた。その上で

福沢は、やはり日本は侵略される非文明のアジア諸国側より、文明国である侵略者の西欧列強側を選択すべきだと強調した。彼は「外交論」で次のように述べている。

「世界各国の相對峙するは禽獸相食まんとするの勢にして、食むものは文明の国人にして食まるゝものは不文の国とあれば、我日本国は其食む者の列に加はりて文明国人と共に良餌を求めん歟、数千年來遂に振はざる亜細亞の古国と伍を成し共に古風を守て文明国人に食はれん歟、獵者となりて兎鹿を狩る歟、兎鹿と為りて獵者に狩らるゝ歟、二者其一に決せざる可らず。」<sup>(4)</sup>

彼は、西欧文明の撰取による日本の富強化は最優先の課題であり、西欧列強による侵略の危険を避けるには、西欧列強のように他地域を植民地化していく道をたどることが不可避であるとみた。さらに、アジア近隣諸国に對して日本がとるべき態度は、とくに壬午の変、甲申の変以後、やはり、東方の「悪友」を離れ、西欧列強と同様の方向に進むことだと福沢は「脱亜論」で述べている。

「我国は隣国の開明を待て共に亜細亞を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故に

とて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免る可らず。我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝絶するものなり。」<sup>(5)</sup>

また彼は、「未開」の中国、朝鮮に對して日本が西欧列強と同様、文明の名において、武力を用いてもその進歩を助けると、「朝鮮の交際を論ず」に述べている。

「日本と朝鮮と相對すれば、日本は強大にして朝鮮は小弱なり、日本は既に文明に進て、朝鮮は尙未開なり（中略）朝鮮の事を憂て其国の文明ならんことを冀望し、遂に武力を用ひても其進歩を助けん。」<sup>(6)</sup>

しかも彼は、西洋のアジアに對する侵略欲は兵備の増進に伴う自然の勢いだと見て、さらに危機感を強めたのである。

また朝鮮や中国が文明化せず頑迷の中にとどまると、日本に禍をなすとし、

「我日本国が支那の形勢を憂ひ又朝鮮の国事に干涉するは、敢て事を好むに非ず、日本自国の類焼を予防するもの」<sup>(7)</sup>

であるとして、日本の朝鮮への干涉は朝鮮の文明化と日本の自国防衛のためであると説いている。

近代国家の下で文明開化から十数年しか経っていないが、日本において、東アジアに対する内政干渉と武力的侵略を正当化しようとする文明論を語る福沢の「脱亜論」には、会沢の『新論』に満ちていた危機感を継承しながら、それを極端に発展させたものであると思わざるを得ない。

## 2 アジアとの「連帯」

「脱亜」方向に対して、西欧文明を賛美し、これを取り入れることを主張すると同時に、その西欧文明をできるだけ相対的にとらえ、それを東洋文化と併置しようとした思想家として、中江兆民（一八四七―一九〇一年）がいる。中江は、一八七五年の「策論」において、日本と英仏などの欧米諸国とは、道徳倫理の面においての優劣は認められず、日本が英仏に学ぶべきは技術（自然科学）と理論（社会科学）であると指摘し、かつ科学技術の進歩は高度微細へと流れ、人間性に立つ視点が失われがちであるとした。

そして彼は道義的な国交を実施する国は理想の文明国家であり、それは東洋の伝統にあると説いた。

「曰く、民をして善に移らしむるや之を如何せん、と、

曰く、之を教うるに道義を以てせん、と、之を教うるに道義を以てするは三代の法なり、之を誘うに工芸を以てするは西土の術なり、西人の意以為えらく、人生れて欲なき能わず、故に衣は其の暖きを欲し食は其の飽くを欲し居は其の安きを欲す、欲して得ざれば則ち争い、争いて止まざれば則ち乱る<sup>8)</sup>」

彼は、一八八三年の「非開化論」で、明治日本においては、数百年の間に蓄積されてきた西欧文明の成果の輝きに目を奪われて、一夜の中に日本国を変えて純然たる欧米にしようとする傾向があるが、これは外形に眩惑されていると批判している。彼は文明の発展段階説を否定はしなかったが、「開化とは晴れ着を着た社会」、「野蛮とは普段着のままの社会」だと見ていたのである。また彼は、西洋文明には賛美すべきものがあるとしながらも、その成果は人類の福祉のためではなく、戦争と破壊に悪用されていると考え、一九世紀は「暗黒なる文明時代」であると捉えていた。

従って中江は、日本が西欧の文明をそのまま導入して、西欧列強に近づくことは、近隣諸国を侵略していくことに繋がるとの認識を抱いていた。国家も人間同様、事実認識や行動基準は、道義的でなければならぬと彼は強



調したのである。

こうした文明観に立ち、アジア諸地域に対する西欧列強の侵攻と植民地化に危機感を抱き、アジアの伝統文化を背景にしたアジア諸国の連帯と西欧列強への抵抗を主張するような傾向が現れたと思われるのである。

樽井藤吉（一八五〇～一九二三年）の『大東合邦論』（一八八五年）は、その最初であった。樽井の主張は、ロシア帝国の南下という明治以前の脅威を含めた西欧人侵略に対する抵抗戦線として、日、朝、中からなる、対等合邦と同盟による大東国建設を唱えた。彼の創見は、後に理想的な発想のひとつであると認識されたと思われる。

同時期には、反西欧の立場で日本の国粹主義を強調する論考を集めた『日本人』という雑誌を一八八六年に発行した三宅雪嶺（一八六〇～一九四五年）と志賀重昂（一八六二～一九二七年）がいた。彼らは、その後一八九一年に誌名を『亜細亜』に変名した。彼らの主張は、日本の固有性を越えて、アジアを意識した特殊なナショナリズムであったと言われる。

三宅は一八九一年の『真善美日本人』で「自国の為に力を尽すは、世界の為に力を尽すなり。」

民種の特徴を發揚する

は人類の化育を裨補するなり。<sup>(9)</sup>

と述べていることから、彼は、東洋の伝統文化を尊重しつつ、非西欧型のもう一つの近代化を目指していたと思われる。

同思想の支流にあった陸羯南（一八五七～一九〇七年）は、政府の列強クラブへの加入を急ぐ政策を、一八九三年の「国際論補遺」で下記のように批判している。

「彼等が国交上に於いて「対等」といふことは唯だ欧米に倣ふといふのみ（中略）。東洋国又は東洋人たるの恥辱を免れんと欲するに在り」<sup>(10)</sup>

以上、国粹主義思想におけるアジア主義もまた、アジアとの「連帯」を促す重大な要素であった。

### 3 日清戦争

一八九四～九五年の日清戦争は、一九世紀末における日本のアジア主義を明白にしたと思われる。アジアとの「連帯」や「興亜」の重要性を主張した彼らは、手段としての軍事関与、まして戦争には批判的であった。また、国粹主義者は、アジアでの民族主義運動のもつ自己革新の力に注目していたのである。樽井のような側には、日

清戦争を朝鮮や中国との連合の実現だと見るものもいた。しかし「アジア主義」の実態は、理想とされていた対等自主の合邦ではなく、武力による侵攻であった。

「脱亜」論者は、この戦争を西欧的新文明と東亜的旧文明の衝突と捉えて、当然戦争に勝利して、日本は西列強クラブに加入すべきだと確信したのである。

こうして、国粹主義を含む「連帯」「興亜」派と「脱亜」派の両者は、二〇世紀における日本の東アジア進出への思想的な基盤を成して、植民地獲得への道を開いたと考えられる。

### 三 二〇世紀前半の「アジア主義」

#### 1 日露戦争前後

二〇世紀に入つての、日本を含むアジア全体への認識は、岡倉天心（一八六二〜一九一三年）が一九〇一年から英文で表した『東邦の理想』、一九〇四年の『日本の目覚め』、一九〇六年『茶の本』などの著作において、より明確にされたといえる。天心は「アジアは一つである」との有名な文言をもって、西洋と対比してアジア的特性を強調しようとした。彼は、究極的なもの、普遍的

なものに対する広やかな愛情がアジア民族に共通の思想遺産であるとして、西洋が主導する「分類万能」の手法を批判しつつ、多様性の中に統合や統一を求めたのであった。

そして『東洋の理想』においては、「東洋の思想の波が日本の国民意識という渚に打ちよせて来るたびに、波の痕を砂地に残して」<sup>(11)</sup>いたので、「日本はアジアの博物館」<sup>(12)</sup>であると見ていた。また『東洋の覚醒』においては、日本とアジアの相互認識について、

「われわれの近隣諸国に関する印象は、大部分、ヨーロッパを出所しているので、実際に歪曲の意図はなくても、おのずからヨーロッパ人の解釈によって潤色されている」<sup>(13)</sup>

と指摘している。そうした状況をふまえたうえで彼はアジアの復活を説き、その第一歩としてアジア人による相互理解を直接に行うべきだとしている。

さらに彼は、日露戦争での日本の勝利を背景に、日本がアジアに夜明けをもたらす存在であるとして、天心は、日本の朝鮮支配を正当化する論理へ踏みこんでゆくのである。

こうした特殊な国粹主義は、日本を西洋に対抗させる文脈で、日本のアジア支配の論理を準備したのであろう。

## 2 過激な思想

日露戦争以後、第一次世界大戦を経て、二〇世紀前半の日本におけるアジア主義は、北一輝（一八八三〜一九三七年）と大川周明（一八八六〜一九五七年）を中心に展開された思想によって、西洋に対抗する傾向がより一層強まったと思われる。

北は、第一次世界大戦を西欧列強への「天罰」とし、アジアに対する日本の役割はさらに拡大されるべきで、日本はインド洋にまで影響力を広げ、その地域の民族をイギリスから解放しなければならぬと訴えた。そしてそのような世界的な役割を担うための国内での政治、軍事的な改革は必然であるとした。

大川の独特な歴史理論によると、世界史は常に東西両文明の闘争によって発展してきたとされた。その戦いの末に近代欧米による世界支配が成立したが、やがて、当然次の東西戦が闘われねばならない。その闘いは西の最強国アメリカと、東の最強国となった日本との間で争われると、大川は一九二五年の『亜細亜・欧羅巴・日本』

で予言した。その戦争に勝つことが日本の使命であるとし、そのための大東亜秩序の建設を主張したのである。このような主張は、第二次世界大戦下の大東亜共栄圏思想ともっともよく合致したと思われる。

以上、二〇世紀初頭からの「脱亜」の思想と「興亜」、「連合」の思想は、日本の帝国主義の発展によって統合され、いわゆる右翼運動に影響を与え、戦争への総動員態勢を支える思想となったのである。

## 四 第二次大戦以後

### 1 「謝罪したる者あるを聞かず」

第二次世界大戦での日本の敗戦は、列強クラブに加入し、列強と対等以上の関係を求める極端な思想を背景に植民地争いをした当時の指導者の失敗であり、アジア主義思想そのものの退廃ではないと思われる。

戦後の日本において、八月十五日は「敗戦の日」ではなく「終戦記念日」とされ、公認されているが、新憲法を「平和憲法」として受け入れたのは、戦争の過ちが認識されているからである。

しかし、太平洋戦争を未だに「大東亜戦争」と呼ぶ者

は、軍事的に失敗があったと認めても、結果として戦後間もなく、東アジア諸国が、西欧支配から解放されたことで戦争の目的が果たされたと考えるのである。だから、戦争の過ちを謝罪する必要はないと主張する保守派、または国粹主義的な団体がある。彼らは、福沢諭吉の「国交際の主義は修身論に異なり」における以下の教訓的な文に忠実であるように見られる。

「国として一度び其非曲を世界中に披露するときは、事実の有無に拘はらず其汚名を雪ぐこと甚だ易からず。過を改むれば其過は益々評判と為り、後悔して謝罪すれば其罪は益々明白と為る可し。(中略) 敵対国の慢心を助るのみならず、世界各国に我が内幕を洞察せられて、遂に何事に就ても共に齒するを得ざるに至る可し。是即ち古来今に至るまで国と国との交際に無理を犯して容易に謝罪したる者あるを聞かず。」<sup>(14)</sup>

おわりに

明治の「脱亜論」は文明論を背景に、また文明論を武器にしていたが、二〇世紀後半においては東南アジア地域の文明化が進むことで、その理論はもはや歴史上のもの

のとなった。二〇世紀後半の日本においては、アジア主義がもつとも理想的な形で展開されたと思われる。戦後、平和路線を歩んだ日本が二〇世紀後半に経済大国として、地域の模範国家となり、周辺地域への経済援助を通してその発展に貢献してきた。ゆえに今日、文化・文明においてアジア諸国と深く関わるようになったのである。

東亜秩序の再建説などを問題としない限り、中国との衝突はないであろうし、中国との協力によって日本は、アジア地域での文化、文明において国際的な役割を果たせるであろう。

こうしたアジア地域の政治的経済的な安定は、日本のみならず、地域全体が日本同様の平和路線を歩むことで、対等かつ自主的なアジア主義が実現される契機となるであろう。

註

(1) 日本思想大系 第五十三卷 『水戸学』 今井宇三郎、瀬谷義彦、尾崎正英校注、岩波書店、一九七三年、一四五頁。

(2) 同右、九四頁。

(3) 同右。

(4) 福沢諭吉 「外交論」 『時事新報』 一八八三年一〇月

- 一日〔『福澤諭吉全集』 第九卷、慶応義塾編、岩波書店、一九六〇年、一九五—一九六頁〕。
- (5) 福沢諭吉 「脱亜論」 『時事新報』 一八八五年三月十六日〔『福澤諭吉全集』 第十卷、二五〇頁〕。
- (6) 福沢諭吉 「朝鮮の交際を論ず」 『時事新報』 一八八二年三月十一日〔『福澤諭吉全集』 第八卷、二八頁〕。
- (7) 同右、三二頁。
- (8) 中江兆民 『中江兆民全集』 松本三之介ほか編、第十卷 岩波書店、一九八四年、十七頁
- (9) 三宅雪嶺 『陸羯南・三宅雪嶺』 鹿野政直編、中央公論社、一九七一年、二八六頁。
- (10) 鹿野政直 『近代日本思想案内』 岩波書店へ岩波文庫別冊十四、一九九九年、九一頁。
- (11) 岡倉天心 『岡倉天心全集』 第一卷、隈本謙次郎ほか編、一六頁。
- (12) 同右、一七頁。
- (13) 同右、一四五頁。
- (14) 福沢諭吉 「国交際の主義は修身論に異なり」 『時事新報』 一八八五年三月九日〔『福澤諭吉全集』 第十卷、二二六頁〕。